様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８０９５７

研究課題名（和文）登校の問題を持つ若年者を対象とした社会不安障害への集団認知行動療法の効果検証

研究課題名（英文）Effectiveness of a group cognitive behavioral therapy for adolescents presenting social anxiety-based school refusal

研究代表者
河合　正好（KAWAI, Masayoshi）

常葉大学・保健医療学部・教授

研究者番号：３０２８３３５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：登校の問題を持ち社交不安障害と診断される39名を対象とした。17名には6か月間認知行動療法を実施し（CBT群）、残りの22名にはスクールカウンセリングを実施した（SC群）。介入前後に登校の状況を聴取し、LSASにより社交不安を評価した。登校状況について、CBT群ではSC群よりも改善率が高かったが有意差は認められなかった。社交不安に関して、CBT群ではLSAS得点はCBT前に比べ、CBT後では有意な低下が認められたが、SC群ではSC前後に有意な差は認められなかった。これらの結果から、登校状況の改善には両者に差が認められないが、社交不安にはCBTはSCよりも有効性が高いことが示された。

研究成果の概要（英文）：In this study, the effectiveness of Cognitive behavioral therapy (CBT) for social anxiety disorder (SAD) was assessed in adolescences with school refusals. In total, 39 youths with school refusals and a diagnosed SAD were included and assigned to a CBT group and a waiting list school-counseling (SC) group. Participants in the CBT group received the group sessions of 60 minutes once a week for six months and continued homework which focused on exposure to social situations. All participants completed baseline and post-intervention assessments.
Improvement of the situation of the school attendance was found in 64.7% of the subjects in CBT group and in 50% in SC group after 6 months intervention, but no significant difference was found between the groups. Social anxiety assessed by the LSAS-J was significantly decreased in CBT group after 6 months intervention, but not in SC group. These results suggest a possible use of CBT for adolescents presenting anxiety-based school refusal.

研究分野：臨床精神医学

キーワード：社会心理学　カウンセリング　認知行動療法　社会不安障害

１．研究開始当初の背景

不登校や保健室登校などの登校に関わる問題を持つ若年者の増加が社会現象となり、有効な対策の確立が急務となっている。登校の問題を持つ者の中には社会不安障害（social anxiety disorder: SDA）と診断されるものが含まれているが、現状こうした精神医学的判断を踏まえてのスクールカウンセリングはなされておらず、介入に対する明確な指針は示されていない。SAD は、社交や対人場面での不安を主症状とする精神障害であり、わが国では従来対人恐怖症と呼ばれてきた。欧米での生涯有病率は12%とされ、わが国でも 300 万人以上の患者がいるとの報告がある。症状として、強い不安や緊張、恐怖を感じ、手足の震えやめまい、吐き気、赤面、次の言葉が出てこない、呂律が回らないなどであり、通常のあがり症が人からの注目を集めるような場面でのみ起こるのに対して、SAD は人前でのスピーチや発言、他人との会話、人前での食事、電話での応対など他人との接触、コミュニケーションに対して強い不安や恐怖を感じてしまう。SDA の発症は 15 歳前後の思春期に多いことから、不登校や引きこもり、ニートの原因となっている。

２．研究の目的

近年、SDA に対する集団認知行動療法の有効性が我が国の精神医療から報告されているが、若年者のみを対象とした報告はなく、スクールカウンセリングへの応用を目的とした認知行動療法の試みはなされていない。

本研究では社会不障害により登校の問題が生じている若年者を対象として、集団認知行動療法の効果を通常のスクールカウンセリングと比較検討した。

３．研究の方法

精神科クリニックに受診した登校の問題を持つ若年者の中、DSM-IVTR の社交不安障害の診断基準を満たす 39 名（平均年齢 16.2 歳±3）を対象とした。全ての対象に文書での同意を得た後に研究に導入した。対象を 2 群に分け、17 名（男性 2 名、女性 15 名）には 6 か月間集団認知行動療法（CBT）を実施した（CBT 群）。CBT は CBT の十分な経験を有する臨床心理士が 2-3 名からなる集団に対して週に 1 回（60 分間）の心理教育を行い、加えて、個人 CBT として曝露反応法、曝露反応妨害法、行動強化法、モデリング法暴露による課題を与えた。CBT の効果の指標として、介入前後に登校の状況を聴取し、社交不安、抑うつの程度をそれぞれ Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版（LSAS-J）、Beck Depression Inventory-Second Edition（BDI-II）を用いて評価し、さらに機能の全体的評定を The Global Assessment of Functioning（GAF）により得点化した。

残りの 22 名（男性 10 名、女性 12 名）には 6 か月間のスクールカウンセリング（SC）を実施した（SC 群）。SC は SC の経験を有する者が担当し、週に 1 回 60 分の通常のカウンセリングを行い、主として対象者への傾聴と支持を行った。SC の効果は CBT と同様に、登校状況の聴取、LSAS-J、BDI-II、GAF による評価を介入前後に行った。

また、背景因子として、年齢、性別、不登校の期間についての情報を聴取し、知的な背景因子として Wechsler Adult Intelligence Scale（WAIS-III）を実施した。

得られた結果を両群間で比較検討した。両群間のノンパラメトリカルな指標の解析にはχ二乗検定を用い、パラメトリカルな指標の検定にはT検定を用いた。それぞれの群でのLSAS-J、BDI-II、GAFの介入前後の判定には対応のあるT検定を用いて解析した。統計解析はSPSS version 22を用いた。

４．研究成果

CBT群では男女の割合は2対15であり、SC群の10対12に比べて男性が有意に少なかった（p=0.037）。その他の背景因子について、対象の年齢（CBT群：平均15.7歳±3.1、SC群：平均16.6歳±2.9、p=0.34）、不登校の期間（CBT群：平均18.6か月±16.5、SC群：平均9.4か月±12.4、p=0.053）、WAIS-IIIでの総合IQ（CBT群：平均100±13.5、SC群：平均94.6±22.9、p=0.54）には両群間に有意な差は認められなかった。

社交不安障害以外の精神医学的診断については、CBT群では広汎性発達障害1名、うつ病2名の合併があり、SC群ではうつ病7名の合併があったが両群間で有意な差は認められなかった（p=0.26）。

登校状況について、CBT群では17名中11名（64.7%）で改善が得られ、SC群（50%）よりも改善率は高かったが、両群間に有意の差は認められなかった。

社交不安に関して、CBT群ではLSAS-Jの総得点はCBT前が平均56.3±6.4であり、CBT後は平均50.6±5.9と有意な低下（p<0.01）が認められた。これに対してSC群ではSC前のLSAS-Jの総得点は平均54.3±6.3、SC後は平均50±8.6であり、SC前後に有意な差は認められなかった（p=0.07）。抑うつに関してBDI-II得点はCBT群（前：11.1±4.6、後：6.2±3.4、p<0.01）及びSC群（前：13.4±5.9、後：8.1±4.1、p<0.01）で有意な減少が認められた。機能の全体的な評定に関してGAF得点は、CBT群（前：49.6±7.4、後：60.1±12.2、p<0.01）及びSC群（前：47.4±5.7、後：56.9±10.4、p<0.01）で有意な低下が認められた。

これらの結果から、不登校の問題を有し、社交不安障害と診断される若年者に対するCBTとSCの効果では、登校状況の改善には有意な差が認められないものの、CBTの方がSCよりも改善率が高いことが示された。また、社交不安については、CBTはSCよりも有効性が高いことが示された。抑うつ、および機能の全体的な評定に関してはCBTとSCは両方ともに十分な効果があることが示された。

以上により、登校の問題を持つ社会不安障害の若年者にCBTを用いることの有用性が示唆される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4件）

中島登代子、古谷学、佐渡忠洋、前田正、柴田俊一、河合正好、柳本賀奈、中島法子．高等学校教育現場の風景　－不登校生徒への対応に関する現職教員へのアンケート調査より－．常葉大学健康プロデュース学部雑誌 10：103-107，2016.

大場美恵、河合正好．臨床実習評価とYG性格検査からみた性格因子の関連　－第2報専門学校と大学の比較－．常葉大学保健医療学部紀要　5：69-75，2014.

河合正好．統合失調症の社会機能訓練とその効果を高める新たな試み．常葉大学保健医療学部紀要　6：7-15，2015.

大星有美、河合正好、青山満喜、筒井祥博．健常若年者における記憶機能と遂行機能の関係及び前頭前野賦活との関連性について．常葉大学保健医療学部紀要　7:35-43, 2016.

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
河合正好（KAWAI, Masayoshi）
常葉大学保健医療学部教授
研究者番号：30283352

(2)研究分担者
中島登代子（NAKAJIMA, Toyoko）
常葉大学健康プロデュース学部教授
研究者番号： 60325818

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）